

『キリスト者の結婚や離婚』

'21/05/16

聖書箇所: マルコの福音書 10 章 1-12 節 (新約 p.85-)

つい先日、また、ある芸能人(有村崑)が不倫疑惑を起こしてしまったため、テレビやラジオなどの全レギュラー番組を降板して、芸能活動を自粛したという報道がありました…。いえ、芸能人だけではありません。恐らく、皆さんの周りでも、様々な夫婦間のトラブルや離婚などの話を耳にされることがあると思います。間違いなく、そのほとんど全てが愛し愛されて結婚されたカップルであったはずなのに、一体、どうして、そんなことになってしまうのでしょうか？

命題: イエスは、結婚や離婚、また、再婚についてどう教えてくださった？

正直言って、今は、30-40年前とは違って、もう離婚も再婚も、それほど珍しくないケースになっています。しかし、昔も今も変わっていないのは…、「誰も、離婚をしたくて結婚する人たちは居ない！」ということです。皆、幸せな結婚生活を夢見て、最初は結婚するはずで。そうでしょ？…しかし、それが、なかなか、上手くいかなくて…、最終的に離婚という選択を選ぶしか無いというところまで行き着いてしまうのではないのでしょうか？可哀そうなのは、その子どもたちです。その子どもたちには、ほとんど選択肢がありません。なのに、自分の家族が離れ離れになってしまって、一生消えることの無い「心の傷」を負ってしまうというのが現状です…。

そういったような…、「切実な家族の問題」に対して、イエスは、どのように教えてくださったのでしょうか？果たして、結婚や離婚、あるいは、再婚ということに関して、神様のお言葉である聖書は、どう教えてくれているのでしょうか？今日のみことばは、そういったことを教えてくれるものであります。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばである、マルコ 10:1-12 をお開きください。今日は、このみことばから、イエスは、私たちの結婚や離婚、あるいは、再婚について、どのように教えてくださったのか？ということについて、ご一緒に学んでまいりましょう。そうすることによって、願わくは、私たちの結婚生活や、あるいは、結婚に関するアドバイスが、神様のみことばにかなまったものとなって、私たちの結婚生活を通して、私たちの救い主であられるイエスのことを、大胆に証しできていけることを願います。

I・私たち人間が抱えている、「罪」の問題！(1-5 節)

まずは、今日のみことばの内、1-5 節が教えてくれている、「私たち人間が抱えている“罪の問題”について見ていきましょう。どうぞ、今日のみことばであるマルコ 10 章の内、1-5 節までをご覧ください。そこには、このように記されています。

- 1 イエスは、そこを立って、ユダヤ地方とヨルダンの向こうに行かれた。すると、群衆がまたもみもとに集まって来たので、またいつものように彼らを教えられた。
- 2 すると、パリサイ人たちがみもとにやって来て、夫が妻を離別することは許されるかどうかと質問した。イエスをためそうとしたのである。
- 3 イエスは答えて言われた。「モーセはあなたがたに、何と命じていますか。」
- 4 彼らは言った。「モーセは、離婚状を書いて妻を離別することを許しました。」
- 5 イエスは言われた。「モーセは、あなたがたの心がたくななので、この命令をあなたがたに書いたのです。」

●当時の結婚観について

この時、イエス様の一行は、ガリラヤのカペナウムを離れて、そこから南へ移動します。今、前の画面に

表示されてありますように、この時から、イエス様の一行は、ユダヤ地方と言うか、ヨルダン川の東側へ行かれたようです。もう間もなく…、ま、聖書的に言えば、マルコ伝の 11 章から、イエス様たちはエルサレムへ入城されて、「最後の1週」が始まります。この時は、そういったタイミングでありました…。

さて、そういったような時でも、イエス様たちの周りには、また、群衆が集まっておりまして、イエス様は、その集まった群衆たちに、神の国に関する話をされていたようです。今日のみことばの平行箇所であるマタイ 19 章を見てみますと、そこでも、イエス様は癒しをされていた、ということが記されています。

すると、そこに、パリサイ人たちがやって来ます。残念なことに、彼らは純粋な気持ちからではなく、不純な動機で、イエス様に質問をしてきたようです。それは、離婚に関することでした。…そこから、今日の物語が始まっていきます。

実は、この当時、離婚というものは、日常的になされていました。ひょっとしたら、今の日本以上だったかも知れません。…と言いますのも、そういったことを積極的に教えるグループがいたからです。その前に、どうぞ、できましたら、旧約聖書の申命記 24:1 のみことばを紹介させていただきます。そこには、このように記されています。ちょっと、申し訳ありませんが、新改訳聖書の第2版で紹介させていただきますね。『人が妻をめぐって、夫となったとき、妻に何か恥ずべき事を発見したため、気に入らなくなった場合は、夫は離婚状を書いてその女の手に渡し、彼女を家から去らせなければならない。』×2

⇒皆さん、聞いてくださいましたよね？…確かに、このみことばは、離婚を認めているように見えますでしょ？…そうして、特に、注目していただきたいのは、この真ん中あたりの、『妻に何か恥ずべき事を発見したため、気に入らなくなった場合…』というくだりです。実は、ここで教えられてある『何か恥ずべき事』という内容を、この当時、大勢の民衆たちから支持されていた律法学者のヒルレル(ヒレルとも)派のグループの者たちは、こんな風に解釈したのです。

「彼らは、妻が料理をダメにしたり、通りで紡いだり、見知らぬ男と話したり、夫の働いているところで夫の身内の者を軽蔑したり、大騒ぎをする女で隣りの家まで声が聞こえるような女の場合だと解釈した。ラビのアキバは、この意味を拡大して、男の目に自分の妻より美しい女がいた場合にもあてはまるとした…(以下略)」そうです。

皆さん、分かっていただけます？…イエス様の時代、離婚というものは、理由にもならないような理由で、行なわれていた節があるのです！…と言いますのも、料理をダメにしてしまつて、そんなこと、日常茶飯事じゃないですか？そうでしょ！…しかも、料理が良いとか、ダメだとかって、一体、誰が判断するのですか？もしも、夫が妻と離婚したかったら、例えば、料理が美味しかったとしても、「料理がマズイ！私の好みではない！」と言えば、たったそれだけでも、離婚の事由になり得たのです…。おかしくありません？

●モーセの教えとは？

でもね、皆さん…。実は、モーセが、こういったみことばを記したのは、それだけの理由があったのです。…と言いますのも、イエス様の時代よりも、さらに、1000 年以上も昔の時代であった、そのモーセの時代において…、また、特に、中東地域において、女性は「人間」というよりも、「物扱い」されていました。皆さんも、ご存知でしょ？…この時代、例えば、離婚ということに関しても、ユダヤ教のラビ(教師)の律法には、こんな言葉²が残っています、「女は、その意志の有無にかかわらず離縁させられるが、男の場合には、その意志があった場合に限る」って…。

¹ 「マルコ福音書」(ウイリアム・バークレー著/聖書註解シリーズ3)p.287-288

² 「マタイ福音書上」(ウイリアム・バークレー著/聖書註解シリーズ1)p.161

皆さん、分かってくださいますか？…つまり、離婚という「夫婦間の一大事」において、妻側の意志は全く関係無かった、というわけです。離婚は、夫がしたければ離婚できるし…、もしも、万が一、妻の側が離婚をしたかったとしても、それが夫側の意志でなければ、決して離婚できない…。という、今の時代には、信じられないようなほどの女性蔑視…。また、結婚というものを軽視していた時代だったわけです。

しかし、モーセがしたかったのは、そのような時代にあつて、「せめて…、妻を離婚して、去らせる場合には、ちゃんと離婚状を渡して、女性の身分を保証してあげなさい。女性が次の選択に進めるよう、せめて、離婚状という書類を発行して、その女性がもう夫の妻では無い、ということをご証明してあげなさい」ということであつたのです。だから、イエス様は、こうおっしゃるわけです、5 節、『モーセは、あなたがたの心がかたくななので、この命令をあなたがたに書いたのです。』って…。

皆さん、悲しいと思われませんか？…このモーセの時代であろうと、イエス様の時代であろうと、あるいは、現代の日本であっても、私たち人間の営みや感情というもの、そう大きく変わるものではありません。人は、一生の愛を信じたいし…、できれば、離婚などというようなことは、したくありません。子どもたちにしたって、お父さんとお母さんが別れて、別々になってしまうというようなことは、決して嬉しくないはずですよ！

今、ここ日本にあつては、結婚式のほとんどがキリスト教と言うか、チャペルで行なわれているようです。…だとしたら、その結婚式の多くで、彼らは（信仰をもっているかはどうか別ですが）、神様の前に、永遠の愛…、一生の愛を誓っているわけです。…にも関わらず、現代日本においては、その3組中1組が離婚に至っている計算になるそうです。これが、現代日本と言うか、恐らく、世界中ほとんどの国々で起きている現実です。

今、私たちは、このスマホ1台あれば、それぞれ、簡単に、地球の裏側でもテレビ電話で話せたりする時代です。巷では、リアモーターカーも計画されていて、近い将来、ここ大阪から東京まで、1時間ほどで行けるような時代も近づいてきています。その時速は、何と500km/h だと…。今、私たちの周りにある文化や科学は、すごい勢いで進化しています。…しかし、そんな時代になって、私たち人間の問題や心は、ほとんど変わっていないというのが現状です…。それは、私たちの心の奥底に、罪という、神様のみこころを無視しても構わないような…、自分勝手な思いがあるからです。

II・結婚に関する、神様の **みこころ** ! (6-9 節)

どうぞ、今度は、今日のみことばの 6-9 節をご覧ください。そこで、イエス様は、天地創造と言うか、初めに男と女とが造られた…、その時代にまでさかのぼって、神様の“みこころ”というものを教えてくださいました。どうぞ、6-9 節をご覧ください。そこには、こう記されてあります。

6 しかし、創造の初めから、神は、人を男と女に造られたのです。

7 それゆえ、人はその父と母を離れ、

8 ふたりは一体となるのです。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。

9 こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。]

● **結婚 とは、一生の契約である！**

今読んだみことばは、大変有名なみことばで…、恐らく、ほとんどの方が聞いたことがあると思われそうです。このみことばは、創世記 2 章の後半部分がベースになっていますので、今から、簡単に、創世記 2 章のみことばを紹介したいと思います。そこには、こう記されてあります、『20 人はすべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけた。しかし人には、ふさわしい助け手が見つからなかった。 21 神である【主】は深い眠りをその人に下されたので、彼は眠った。そして、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉を

ふさがれた。 22 神である【主】は、人から取ったあばら骨をひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。 23 人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」 24 それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。 25 人とその妻は、ふたりとも裸であつたが、互いに恥づかしいと思わなかった。』(創世記 2:20-25)

⇒多分、皆さんは、このみことばが語られた経緯をご存知だと思います。この時、天の神様は、アダムを呼んで、「人が…、つまり、アダムが1人で居るのは良くない」とおっしゃって、そのアダムに、全ての動物たちの名前を付けさせます。しかし、すべての動物たちを見ても、そのアダムにふさわしい存在は居なかったのです。きっと、天の神様は、そういったことをアダムに気付かせるために、このタイミングで、動物たちの名前を付けさせたと思われそうです…。そうして、神様は、そのアダムのことを深い眠りにつかせて、アダムのあばら骨から「エバ」という女性を御造りになられます。

そのエピソードの後に記されてあるのが…、今回のみことばで、イエス様が引用されたみことばです。…このみことばを見て分かることは、結婚というものは、私たち人間が、自分たちの必要に合わせて、作り上げたものではなく…、結婚というものは、私たち人間の必要を御覧になった神様が、私たち人間のために、与えてくださった制度である！ということです。そこのみことばから、この結婚という制度を定められた神様のみこころというのが分かります。

それは、まず、第1に、『人はその父と母を離れ…』とあるように、この夫婦という関係は、親子以上のものであるということです。聖書の教えを見てみますと、親子関係というものは、非常に大切なもの…、人間関係の中でも、優先すべきものであるという風に教えられています。しかし、夫婦の関係というものは、その親子関係以上のものなのです！…だから、結婚した夫婦の間には、例え、親子であろうと…、あるいは、兄弟であろうと、その夫婦の間に入ってしまったようでは、それは、決して、神様に喜ばれるものではありません。

いかがです？ 皆さん？…皆さんの夫婦関係の中には、例えば、お子さんが入ってしまったら…、あるいは、ご両親や誰か別の存在が入ってしまったら…、例えば、ここ日本では、「子はかすがい」という言葉があります。ここで言う、「鏝」とは、「材木と材木とを繋ぎ止めるために打ち込む、両端の曲がった大きな釘のこと」を言います。この言葉が言わんとすることは、「例え、夫婦仲が悪くても、子どもへの愛情のおかげで、その夫婦の縁を切らずにいられる…」ということ。つまり、子どもがいるから、夫婦の縁を何とか保ってくれるということなのですが…、子どもがいるから、何とか、夫婦としてやっていける、というのは、神様のみこころではありません。神様が、一番に喜んでくださるのは、例え、子どもが居ようが居まいが、その夫婦が愛し合って…、逆に、その夫婦愛を見て、子どもたちが愛し愛し合うことを学び、相手を尊重する(愛する&仕える)ということの良い見本を親たちから学んでいく、ということが神様のみこころなのです。そうでしょ？

● **神のみこころは、絶対 である！**

どうぞ、今度は、ここ 8-9 節のみことばに注目してみてください。ここで、イエス様は、結婚に関する2つ目のみこころについて教えてくださいました。それは、夫婦というものは、神様によって結び合わされた者たちであるがゆえに、私たち人間は、それを引き離してはならない！というものです。

例え、皆さんは、何か一体となってしまったものを分離されたような経験をお持ちでしょうか？…例え、そういったような経験が無かったとしても、一度、一つに融合してしまったようなものを分離することが、如何に難しいことか、想像できると思います。…しかし、そういったようなことを、このみことばは教えてくれているわけで、1度、結婚をして、夫婦となった者たちは、簡単には引き離せないし…、また、引き離して

はならないのです。

だから、私たちがよく見る結婚式では、新郎と新婦とが、神に対して、多くの証人たちの前で誓いをするわけです。「健やかな時も、病める時も、あなたは、この人を“愛し続けることを誓いますか？”」って…。そうでしょ？ そのように、結婚とは、本来、私たちの一生で、たった1度の誓いであり…。たった1度の契約であるべきです。…それこそが、私たちの主なる神様のみこころであります…。

しかし、じゃあ、一体なぜ、私たち人間は離婚してしまうのでしょうか？ …もちろん、その理由は、単純なもの…。1つだけではないでしょう…。例えば、離婚される方々の多くは、「もうガマンの限界だ！」というようなことを口にされます。…私たち人間には忍耐が十分ではないのです。また、それ以外でも、離婚の理由のトップは、男女とも、「性格の不一致」だそうです。でも、別々の家庭や環境で育った者たちの、性格が果たして、完全に一致するのでしょうか？ …また、離婚しない夫婦は皆、同じ性格をしているのでしょうか？ …仲の良い夫婦の性格や趣味が全然違うということも、よく聞きますでしょ？ …つまり、私たち人間には、相手のことを思いやるということが、なかなかできないのです。

それ以外でも、男性側の離婚事由に多いのは、異性関係だそうです。これも、私たちが、もし、パートナーだけに貞操を守って…。そのパートナーも、相手のことを愛し、敬って、互いに、その責任を全うし合っていれば、不倫などもかなり起こりにくいはずですよ。また、最近多いDV(=domestic violence)という問題も、私たちが、お互いに、コミュニケーションを取って、お互いを愛し合っていれば、そうそう、起こる問題ではありません…。

つまり、私が今、何を言いたいのか？ …もしも、私たち人間が、真の神様を信じ、その神様の助けを戴きつつ…。神様のみこころに沿っていくなら、ほとんど離婚は起こり得ない！ ということです。現に、私が知っているクリスチャンの多くは、それこそ、教会単位(「ある教会のメンバーのほぼすべて」の意)で、ほとんど、「離婚の危機」などというものを経験しておられません。

ひょっとしたら、私たちは、どこかで神様の力を信じることができずに、諦めてしまっている場合って、無いでしょうか？ …もう、これだけやって来てダメなのだから、離婚もやむを得ない、って…。でも、皆さん、神様の前に、離婚なんていう選択肢は無いのです！

有名な聖書のみこころとして、**マラキ書**にこうあります、『わたしは、離婚を憎む』とイスラエルの神、【主】は仰せられる。…』(マラキ書 2:16)って…。良いですか、皆さん。結婚という制度を定められた、神様御自身が、こうおっしゃるのです、「わたしは離婚を憎む！」って…。もしも、私たちが、神様の全能性を信じることをせず…。初めから、離婚というものを頭のどこかで選択肢に入れてしまっていたら、本当に、神様のみこころに沿って歩んでいこうとするのでしょうか？ …私が思いますのは、そういった部分が、今の多くの日本人クリスチャンたちに欠けている部分ではないでしょうか？ …だって、私たちは誓ったわけでしょ？ …「良い時も、悪い時も、私は、この人を愛し続けます！」って…。

Ⅲ・みこころに反した 再婚 ! (10-12 節)

さあ、それでは、最後3つ目のポイントを見ていきましょう。どうぞ、今日のみこころの内、10-12 節をご覧ください。そこで、イエス様は、神のみこころに反した“再婚”ということについて教えてください。

10 家に戻った弟子たちが、この問題についてイエスに尋ねた。

11 そこで、イエスは彼らに言われた。「だれでも、妻を離別して別の女を妻にするなら、前の妻に対して姦淫を犯すのです。

12 妻も、夫を離別して別の男にとつぐなら、姦淫を犯しているのです。」

●みこころに反することの、問題 !

さて、ここでも、イエス様の弟子たちは、すぐ、その場所では質問をせずに、後になってから、イエス様に質問をしたようです。そこで、イエス様が教えてくださったのは、11-12 節、『だれでも、妻を離別して別の女を妻にするなら、前の妻に対して姦淫を犯すのです。妻も、夫を離別して別の男にとつぐなら、姦淫を犯しているのです。』というようなものでした。

⇒皆さん分かってくださいますか？ …実は、ここで、イエス様が弟子たちに教えてくださった内容は、大変厳しいものでした。…ひょっとしたら、私たちは、ここで、『姦淫』と聞いても、ここ日本における不倫か何かのように思ってしまうかも知れません。しかし、ご存知のように、この聖書のみことばは、そうは教えません。皆さんも、ご存知でしょ？ …例えば、ヨハネ伝 8 章に登場してくる、あの姦淫の現場で捕らえられた女は、どんな危機に遭いましたか？ ⇒彼女は、危うく、石打ちの刑に処される場所だったでしょ？ …と言いますのも、「姦淫してはならない！」という戒めは、あの十戒の第7番目の戒めであるし、また、旧約聖書のレビ記 18 章や 20 章を見てみますと、そこでは、かなり厳しい報いを受けるべきことが教えられてあります。それほどまでに…。間違った離婚をしてしまうことは、神様の前に重罪なのです。

でも、実は、今日のみことばの平行箇所である**マタイ 19 章**には、こんなイエス様のお言葉が記されています、『まことに、あなたがたに告げます。だれでも、不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者は姦淫を犯すのです。』(マタイ 19:9)って…。皆さん、聞いてくださいましたか？ …ここで、イエス様は、『不貞のためでなくて…』という風におっしゃっておられます。実は、それとそっくりなことを、イエス様は、マタイ伝 5 章、「山上の説教」の中でも、同じように教えてくださっています。つまり、言い換えますと、もしも、相手側が、不貞…。つまり、パートナー以外の者と性的な関係を持つという罪を犯してしまったなら、その場合の離婚は認められる！ ということです。

それと、**I コリント書 7 章**には、あのパウロが**コリント教会**からの質問に答える感じで、結婚や離婚について、こんな風に教えてくれています。『13 また、信者でない夫を持つ女は、夫がいつしよにいることを承知している場合は、離婚してはいけません。14 なぜなら、信者でない夫は妻によって聖められており、また、信者でない妻も信者の夫によって聖められているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れているわけです。ところが、現に聖いのです。15 しかし、もし信者でないほうの者が離れて行くのであれば、離れて行かせなさい。そのような場合は、信者である夫あるいは妻は、縛られることはありません。神は、平和を得させようとしてあなたがたを召されたのです。』(I コリント 7:13-15)

⇒いかがですか？ 分かってくださいましたか？ …このみことばがはっきりと教えてくれていますように、もしも、未信者である相手側が、離婚を望み…。その相手の方から離れていくのであれば、そういった場合の離婚も認められる、ということです。…しかし、聖書全体を探してみても、神の前に赦される離婚は、これら2つの理由だけです。

もしも、こういったような…。神様に認められないような理由でもって離婚をしてしまうと、そこに、神様からの祝福はありません。だから、私たちは、まず、結婚をする前に、本当に、この結婚が神様の前に正しいかどうか？ 1度結婚したら、もう2度と離婚なんていう選択肢は無いのだ！ ということを、よく覚えて神様の前に正しい選択をしないとイケないのです。…いえ、大切なのは、神様に喜ばれる結婚をするかどうか？ …ではなくて…。それ以前に、私は、この神様の前に、自分の全生涯をかけて、この神様を信じ、この神様のために生きていくかどうか？ …そういった決心があるかどうか？ …を吟味することです。…と言いますのは、それこそが、救いに至る…。本物の信仰なわけでしょう？ …私たちが少し前、マルコ 8 章で学んだように、イエス様に従うには、「自分を捨て、自分の十字架を負った上で、このイエス様についていく！」という決心、つまり、本物の信仰が必要だからです。

● 神の愛と、神の 赦し ！

しかし、今日、私たちが学んできたように…、また、私たちが、もう十分なほど知っているように、私たち人間は皆、罪深い…、間違いだらけの人間です。でも、そんな私たちを、天の神様は選び…、救い出してくださいました。

皆さんも多分、ご存知のように、この結婚という契約は、時々、私たちと神様との関係に例えられます。例えば、旧約聖書のエレミヤ書 3 章には、こんな主のお言葉があります、『8 背信の女イスラエルは、姦通したというその理由で、わたしが離婚状を渡してこれを追い出したのに、裏切る女、妹のユダは恐れもせず、自分も行って、淫行を行ったのをわたしは見た。9 彼女は、自分の淫行を軽く見て、国を汚し、石や木と姦通した。10 このようなことをしながら、裏切る女、妹のユダは、心を尽くしてわたしに帰らず、ただ偽っていたにすぎなかった。——【主】の御告げ——』(エレミヤ書 3:8-10)

⇒これは、預言者エレミヤが語った、主なる神様のお言葉です。その昔、イスラエルは、あのソロモンの死後、北王国イスラエルと南王国のユダとに分裂をしてしまいます。分裂後の北王国の初代王、ヤロブアム1世は、北王国の民たちが南王国にあるエルサレムの神殿へ行って、礼拝を捧げないように、北側の町ダンと南側の町ベテルとに、それぞれ、金の子牛の祭壇を作って、そこで礼拝を捧げるよう導きました。また、彼は、祭司のアロンの家系ではなく、自分たちで勝手に祭司たちを選んでしまうという罪を犯してしまったのです。

そういうことが、ここのみことばは、神様との契約…、神様との婚姻を裏切ってしまった全イスラエルの罪…、つまり、霊的な不品行であると非難されています。ここで言われている『石や木』というのは、「石や木で作られた偶像の神々」という意味です。つまり、天の神様は、もうイスラエルとの契約を捨てて、彼らのことを見捨ててしまっても、何の問題も無かったのです…。

しかし、天の神様は、霊的な不品行…、つまり、偶像礼拝に走ってしまったイスラエルの者たちを完全に見捨ててはられません。確かに、彼らは、1度、それぞれの国が滅ぼされるという神の裁きに遭いましたが…、しかし、それでも、神様の御計画が、完全に変わってしまったわけではありません。神様のイスラエルに対する愛も御計画も、まだ、有効なのです！

< 励ましの言葉 >

このように、私たちが信じ仕えている真の神様は、愛の神様であり…、同時に赦しの神様でもあられます。だから、聖書の中には、何度も、赦しに関するエピソードがあって、私たちにも、「赦してやりなさい！」ということ命じられています。皆さん、創世記に出てくる、あのヨセフのことをエジプトに売り飛ばしてしまった兄弟たちを、ヨセフは、どうしました？

ヨセフは、かつて、自分のことをエジプトへ売り飛ばしてしまった兄弟たちが、あの頃のまま、何も変わっていないかどうか、弟のベニヤミンを使って、彼らのことを試したのです。そして、ヨセフは、自分の兄弟たちが、かつてのような…、愛の無い人物ではなくて、自分の弟を思いやる…、愛に溢れた者へと成長していることを確認して、名乗りを上げます(創世記 44-45 章)。

天の神様は、私たちの弱さを、当然御存知です。もしも神が、私たちに1度も失敗してはならない！と教えるなら、私たちの誰一人、合格する者は居ないでしょう？…しかし、神様は、赦しの神であられ、また、神は、私たちを助け…、私たちのことを神に似た者へと変え続けていてくださいます。

神様は、イエス様のことを3度も否定して、イエス様のことを見捨ててしまったシモン・ペテロのことさえも赦し…、また、彼のことを強くして、神のために用いられました。…私たちは、失敗しても、また、悔い改めたら良いのです。そうでしょ？

どうか、今日、このメッセージを聞いてくださっている方々の中で、まだ、イエス様のことを信じておられない方は、1日も早く、このイエス様のことを信じて、罪の赦しを受け取っていただきたいと思います。神様から、あなたの罪が赦されるのは、今、生かされている間だけです。…でも、私たちは、自分がいつまで生かされているかわかりません。どうか、手遅れになる前に、1日も早く、このイエス様を信じ、救いを、ご自分のものとしてくださいますよう、お勧めします。

また、クリスチャンの皆さん…。天の神様は、大変厳しい御方です。私たちは、結婚という選択を、どのように選び取っていくかで、自分自身の信仰が試され…、本当に、神様のことを1番に愛しているかどうかを試されます。どうか、私たちの神であり…、私たちの主なるイエス様のことを、1番に愛し仕える者であっていただきたいと思います。そうすることが、主のみこころにかなった人生を送ることができて…、例え、結婚しようと結婚しまいと、それが1番のあなたの祝福に繋がります…、あなたが神に用いられる1番の秘訣なのですから…。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。